

## 「日中歴史マイクロ資料」概要

小都 晶子

「日中文庫」には、約6000点のマイクロ等非図書資料が含まれている。日本国内で購入されたものが約半分、残りの半分は中国で購入されたものである。うち、中国で購入されたマイクロフィルム、マイクロフィッシュは、1990年代に日中歴史研究センターが中国側の取次を通じて中国各地の図書館、档案馆（公文書館）から購入、一部のものは新たに作製を依頼して入手したものである。

これら中国で購入されたマイクロ資料には、各地の図書館、档案馆で作製されたもののなかに、档案（公文書）史料や、油印本（ガリ版刷史料）を含む「満洲国」期の日本語文献（日文資料）など、きわめて貴重な資料が含まれている。また新聞、雑誌、公報についても、日本国内ではまとまって利用できないものが大半である。全体的には中国東北地域のもものが大部分を占めている。

また一部のマイクロは、国家図書館の「全国図書館文献縮微複製中心」で作製、販売されたものである。全国図書館文献縮微複製中心は、中国各地の図書館に所蔵されている古典籍善本、新聞、雑誌などの貴重資料のマイクロ化、復刻を進めている<sup>1</sup>。現在、これらのマイクロ資料や復刻版資料は、日本国内でも中国書籍を扱う書店などを通じて購入することが可能であり、大学図書館、あるいは研究者個人でも徐々に購入されつつある。しかし、書誌登録の煩雑さなどもあって、所蔵検索に反映されているものは少なく、一般には利用しにくいのが現状である。

日研では2009年度以降、本格的にこれらのマイクロ資料の整理および一般公開のための準備を進めてきた。ここでは「日中文庫」所蔵のマイクロ資料のうち、主要なものを紹介する。全体については目録を参照されたい。

### 1) 「抗日戦争正面戦場档案史料」

本史料は、中国第二歴史档案馆（南京市）が所蔵する「国防部史政局和戦史編纂委員会档案」（全宗号787）から、武漢陥落（1938年10月）以後の日中戦役に関する中国側の記録をまとめたものである。「国防部史政局和戦史編纂委員会档案」には、国防部史政局と戦史編纂委員会が作成した文書のほか、これらの機関が戦史編纂のために収集した各軍事機関の文書、資料の計9170巻が収められている。とくに後者には、1920年代後半の「北伐」、1920年代末から30年代半ばにかけての中国共産党ソビエト区に対する包圍攻撃（「圍剿」）、1937年以降の抗日戦争などに関する公文書が多く含まれている。そのうち、本マイクロ資料には、1939年以降に国民政府軍が戦った「正面の戦場」の各戦役に関する記録、公文書が収録されている<sup>2</sup>。収録されているのは、以下の15の戦役である。

南昌会戦（1939年3～5月、5巻）

随棗会戦（1939年5月、3巻）

第一次長沙会戦（1939年9～10月、4巻）

桂南作戦（1939年11月～1940年10月、12巻）

<sup>1</sup> 2009年末現在、約10万点に及ぶ（<http://swzx.nlc.gov.cn/zxjj.htm> 2011年1月27日閲覧）。

<sup>2</sup> 中国第二歴史档案馆編『中国第二歴史档案馆簡明指南』（北京 中国档案出版社、1987年）94～95頁。

棗宜会戦（1940年5～6月、12巻）  
豫南会戦（1941年1～2月、2巻）  
上高会戦（1941年3～4月、4巻）  
第二次長沙会戦（1941年9～10月、7巻）  
晋南（中条山）会戦（1941年5月、2巻）  
第三次長沙会戦（1941年12月～1942年1月、6巻）  
常德会戦（1943年11月～1944年1月、4巻）  
豫中（中原）会戦（1944年4～6月、4巻）  
長衡会戦（1944年9～12月、6巻）  
桂柳会戦（1944年9～12月、4巻）  
滇緬作戦（1943年10月～1945年3月、18巻）

従来、日中戦争史に関しては、日中でそれぞれに整理、研究が進められてきたが、本資料は、各戦役はもとより、15年にわたる戦争史全体を多角的に把握するうえで、大変貴重な資料である。

## 2) 中国東北地域の档案（公文書）類

中国の公文書（档案）は、機関や組織、個人ごとに分類されているが、その分類の基本単位を「全宗」といい、「〇〇（＝機関、組織、人名等）全宗」と表記される。「日中文庫」に収められている東北関係の档案マイクロには、「軍督部堂」、「蒙荒総局」などのように、ひとつの全宗から全巻が収録されたものと、「《東三省官銀号》档案史料」、「“九・一八”事変档案史料」などのように、複数の全宗から関係档案を抜粋して編集された、いわば資料集のようなものがある。いずれも遼寧省档案馆（瀋陽市）所蔵の档案から作成されている。それぞれの概要は、以下の通りである。

（ひとつの全宗から作成されたもの）

「軍督部堂」38巻（全宗号JB14） 1900（光緒26）年～1909（宣統元）年

清朝の培都であった盛京（瀋陽）には盛京將軍、清末には東三省總督が置かれた。

「軍督部堂」はこの盛京將軍と東三省總督衙門の全宗である。義和団事件の際のロシア軍の侵攻によって、現存するのは1900年以降のもののみであるが、清末における東北3省の政務や軍事、財政金融、実業、文教衛生、対外交渉など、多方面にわたる文書が収録されている<sup>3</sup>。

「蒙荒総局」1巻（全宗号JB22） 1903（光緒29）年～1911（宣統3）年

「蒙荒総局」は、内モン古開発や新式農業の導入を管掌した。東部内モン古地域の地理状況や風俗、王府の位置・沿革などに関する調査、交通整備や農産業開発に関する立案、各種章程などが収録されている<sup>4</sup>。

「安奉鐵路購地総局」1巻（全宗号JB27） 1909（宣統元）年～1912（民国元）年

日露戦争中に日本軍は奉天～安東間に軽便鉄道を建設したが、「安奉鐵路購地総局」は清側がこれに対応して設置した用地取得のための機関である。

「奉天旗務処」1巻（全宗号JB28） 1907（光緒33）年～1911（宣統3）年

1907年、奉天行省に八旗事務を管轄する「旗務司」が設置された（1908年に「旗務処」に改編）。旗制改革に関するやり取りや旗地・皇産の整理、八旗調査の統

<sup>3</sup> 遼寧省档案馆編『遼寧省档案馆指南』（北京 中国档案出版社、1994年）32～34頁。

<sup>4</sup> 同上、40～41頁。

計表などが収録されている<sup>5</sup>。

(複数の全宗から抜粋して作成されたもの)

「中日商辦本溪湖煤鉄公司專題」4巻 1910(宣統2)年～1931(民国20)年

「本溪湖煤鉄公司」は、大倉財閥が1906年に設立した製鉄会社であり、中華人民共和国成立以後は「本溪煤鉄公司」となる。「奉天省長公署」、「本溪県公署」、「奉天交渉員署」、「奉天財政庁」、日本語資料などから採録された会社の生産規模、経営、人事などに関する档案、資料が収録されている。図版多数。

「《東三省官銀号》档案史料」7巻 1905(光緒31)年～1931(民国20)年

「東三省官銀号」は、1905年12月、奉天に開設された官営の金融機関(開設時は「奉天官銀号」、1908年に改称)であり、「奉天票」発行や投融資などの金融業務を行ったほか、質屋・銭業・焼鍋などを経営した。本史料には、「奉天省長公署」、「奉天省商会」、日本語資料などから、官銀号および各分号の機構の沿革や章程、各種企業調査、統計、貨幣発行、預金・貸付業務活動などに関する約600余点の档案が収録されている。

「東北地区禁煙禁毒档案史料」5巻

「奉天省長公署」、「熱河省長公署」、「奉天交渉員署」、日本語資料などから、清末から建国後までの約600余点が収録されている。内容は、アヘン売買、各時期のアヘン禁止の措置・方法、各地からの報告、建国後の娼妓対策などである。

「“九・一八”事変档案史料」2巻 1928(民国17)年～1932(大同元)年

「奉天省長公署」、「奉天交渉員署」、「日本侵華專題」などから、満洲事変前後の東北陥落の過程、日本軍の暴行、地方の損失状況、国内外の反響、東北の抗日運動などに関する档案、資料が収録されている。

### 3) 中国東北三省の公報類

清末の「新政」によって、東北地域では従来の3将軍が廃され、奉天、吉林、黒龍江の3行省が設置された。3省はそれぞれ『公報』を刊行した<sup>6</sup>。さらに1928年、張学良政権による「易幟」の後、東北3省を統括する最高行政機関として奉天(瀋陽)に「東北政務委員会」が設置された。委員会は満洲事変直前まで、公報に相当する『東北政務委員会週刊』を刊行した<sup>7</sup>。

日露戦争勃発後、日本軍は占領した東清鉄道の運営のために野戦鉄道提理部を組織したが、同部は『部報』を刊行していた。さらに日露戦争終結後の1906年には、占領地域の統治のため、旅順に関東都督府が設置された。1919年には、この関東都督府の民政部が関東庁に、軍政部が関東軍に改編された。関東都督府は『府報』を刊行し、1919年以降は関東庁の『庁報』に継続された。いずれも『満洲日日新聞』附録として刊行された。

「日中文庫」には、これら「満洲国」期以前に東北地域にあった日中双方の行政機

<sup>5</sup> 同上、41頁。

<sup>6</sup> 以上、東北3省の政府公報については、南満洲鉄道株式会社総務部資料課編『東三省政府公報索引目録』(大連 南満洲鉄道株式会社、1933年)がある。

<sup>7</sup> このほか、張学良政権期の定期刊物物としては、『軍事月刊』(東北辺防軍司令部長官公署、1928～1931年)、『国民外交週報』(遼寧省国民外交協会宣伝部、1929～1931年)が所蔵されている。

関の公報が収められている。影印本『偽満洲国政府公報』120巻（瀋陽 遼瀋書社、1990年）などとあわせれば、20世紀前半における東北地域の主要な公報類はほぼ網羅される。なお奉天を中心として、一部、「満洲国」期の地方行政機関の公報のマイクロもおさめられている。

#### 4) 中国東北地域の交通関係文献

既述の遼寧省档案館所蔵「安奉鐵路購地総局」档案のほか、満鉄の内部文書、「満洲国」交通部の定期刊行物『満洲交通』など、近代東北地域の鉄道を中心とした交通関係の文献が集中的に収められている。なかでも遼寧省档案館所蔵の日本語文献から抽出して作製された満鉄の鉄道建設、「満洲国」の交通行政などに関するマイクロ資料には、油印本などを含む貴重な資料が多く含まれている<sup>8</sup>。主要内容は、以下のものである。

- ・遼寧省档案館所蔵「安奉鐵路購地総局」全宗
- ・『時局記録』、『北鉄接収記録』（「南満洲鉄道株式会社」档案、全宗号JD1）
- ・満鉄の鉄道建設、「満洲国」の交通行政に関する日本語文書（油印本を含む）
- ・「満洲国」交通部の定期刊行物など

#### 5) その他

そのほかに比較的まとまった資料として、日中戦争時期に武漢や重慶、桂林などで刊行された『抗戦文芸』、『野草』などの文芸雑誌<sup>9</sup>、『三民主義月刊』、『三民主義半月刊』などの言論雑誌がある。抗日勝利をまたいで戦後まで刊行された資料も少なくなく、資料的価値は高い。

また大部の資料として、『順天時報』（1905～30年、北京）、『東三省民報』（1923～1932年）、『武漢日報』（1929～49年、武漢）、『瀋陽日報』（1949～90年、瀋陽）などの新聞資料がある。

「日中文庫」に所蔵されているマイクロ資料、とりわけ中国から購入されたものには、日本国内ではかには所蔵されていないものが多い。さらに、一部の档案マイクロはいまなお現地でも公開が制限されている。これらのマイクロ資料が広く研究者に利用されるようになれば、日本における中国近現代史、あるいは日中関係史の研究に大いに役立つであろう。とりわけ近現代の中国東北地域や抗戦期中国の軍事、社会に関する資料が豊富であり、今後の利用、研究が待たれる。

他方で、原本が非公開となっている一部の档案マイクロ、とりわけデジタル化されたデータについては、今後、利用、公開に際して慎重に対応していく必要がある。

<sup>8</sup> 遼寧省档案館所蔵の日本語文献は約5万冊あり、本マイクロ資料のうち、中国で購入された日本語文献はここから抽出されたものである。なおこれらの日本語文献については、『遼寧省档案館蔵日本文料目録』（瀋陽 遼寧古籍出版社、1995年）上・下が刊行されている。

<sup>9</sup> 抗戦期の文芸雑誌については、王大明・文天行・廖全京編『抗戦文芸報刊篇目彙編』（成都 四川省社会科学院文学研究所、1984年）に、各雑誌の総目録がある。